

わが人生の転機

心に残る

ひと言・人・作品

リレートーク④



中尾昭公・名古屋セントラル病院院長は、難治癌の象徴、膵臓癌（以下膵癌）で独自の手術法を開発した、膵癌切除手術の第一人者で、海外の専門医が教えを乞う世界的権威だ。中尾氏は没頭した研究が「面白かった」と淡々と語るが、その並々ならぬ努力があってこそその成功といえる。法曹界や政治家を目指した高校生は両親の深い愛情に支えられて自分を信じて医師となり、使命感に燃え続ける。岐路において支えられた希有な体験、心に刻む言葉を聞いた。

中尾氏は1948年岐阜県に一人息子として誕生。実家は農家で、父親は中学校の数学教師だったが、戦争で満州から転戦、ジャワで終戦。生死不明だったが、1年ほど経って帰郷して結婚した。両親とも病気がちだったが、愛情を注がれて育った中尾氏は地元の進学校に入学する。将来の人生設計では、当初は医師ではなく法曹界や政治の世界への道を視野に入れていた。

「高校2年までは大学の法学部に進み、弁護士か検事になろうと考えました。また、世の中を良くしたい、と地元の国会議員を見ていて、政治家になることも一時考えましたね。しかし、2年の後期には医師になって帰郷して病院を作りたいとの思いが明確になりました」

1年間浪人生活で、予備校は京都を選ぶ。そして名古屋大学医学部に合格する。当時、医学部は全国で30大学、合格者は3000人ほど。80大学強で1万人以上が合格する今とは受験環境が随分違う。

「本気で勉強をするなら友達のいない街、憧れの京都の予備校に行こうと自分で決めました。教育者の父親は黙ってお金は出してくれました。我々は団塊の世代で競争が激しく、予備校で人気の授業は朝一番、カバンで席を取る多くの生徒が午前5時ごろ教室に入る。授業は9時からなのに。田舎の高校生にとっては新鮮でしたね」

当時は学生運動が盛んで、博士号ボイコット、インターン廃止論も出たが、中尾氏が大学を卒業するころには落ち着き、尾西市民病院で2年間の外科研修を経て、2年後から5年間岐阜県立多治見病院外科に勤務。ここでは消化器、胃癌、大腸癌など膨大な手術をこなすが、肝臓癌や膵癌への

名古屋セントラル病院中尾昭公院長



専門性を高めるために大学に戻ろうと決断する。

「そのころ、手術が不可能とされた膵癌を切除する方法のアイデアがあり、その研究をしたかった。そして結果が出れば、臨床に移したいと決めていました」

大学での研究は消化器悪性疾患の外科治療、肝移植、血液凝固など。膵癌では抗血栓性カテーテルを開発し、門脈カテーテルバイパス法を考案、腸間膜到達法など新手術方法を確立していく。膵臓は食べ物を溶かす透明な液を作る臓器。膵臓は胃の裏側に存在し、膵頭部癌は十二指腸にへばりつき、手術では胃の出口、胆管、十二指腸、膵頭部をすべて切断する。問題は血管。人体には5リットルの血液が流れる。胃や小腸、膵臓などの臓器